

# 下郷コレクションにおける東北地方貝塚の採集資料 その1

## —里浜貝塚 1（骨角器）—

加藤 俊吾

### はじめに

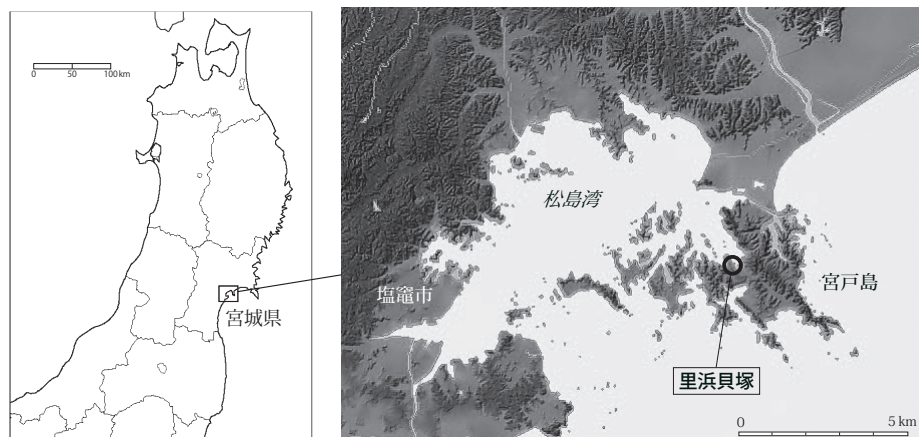
大阪歴史博物館が所蔵する下郷コレクションは、高島多米治という人物によって明治時代に採集された縄文時代資料を中心として形成されたもので、滋賀県長浜市に所在した鍾秀館（下郷共済会）が旧蔵していた。戦後、分散して売却に出された際の一群を大阪市立美術館が購入、1972年に大阪市立博物館へ移管となった。採集品は関東・東北地方の貝塚から集められたものが多く、戦前には著名な研究者にも利用されたが、現在では一部の研究者を除いてその存在は忘れ去られたに等しい。この状況を改善するべく、当館ではコレクションの内容を報告してきた〔大阪歴史博物館編 2012 および 2015〕。

本稿では、この下郷コレクションのうちこれまで手がつけられてこなかった東北地方の貝塚のなかから、高島自身が来訪した可能性が極めて高いと考えられる貝塚の採集資料について紹介するとともに、その考古学的検討を行う。なお紙幅の都合によりまずは宮城県里浜貝塚の採集遺物のうち骨角器について検討する。さらに土器や土製品、採集地点および採集資料の帰属時期についても明らかにしていく予定である。また分散して収蔵されている資料についてもあわせて紹介し、コレクションの総合的な把握に寄与するよう努めたい。

### 1. 下郷コレクションにおける里浜貝塚採集の骨角器

里浜貝塚は宮城県東松島市に所在する（第1図）。当貝塚は松島湾内最大の島である宮戸島に位置し、縄文時代前期から晩期にかけて形成された。現在は国指定の史跡となっている。1918年に東北帝国大学の松本彦七郎によって発掘調査が行われた後、1950年代にも東北大学教育教養部および宮戸島遺跡調査会な

どにより調査が実施された〔会田 2007b〕。さらに1980年代になると東北歴史資料館が本格的な調査を行い、より詳細な内容が明らかにされるにいたった〔東



第1図 採集遺跡の所在地

北歴史資料館 1983 ほか]。なお、高島多米治による里浜貝塚資料の収集についてはこれまで具体的に明らかにされていないが、明治 30 年代頃だったと考えられている [藤沼 1981; p. 8]。

大阪歴史博物館が所蔵する下郷コレクションには地名が注記されており、これが採集地を示していると考えられる。ただしそれ以上の情報は何もなく、実物資料が存在するのみとなっている。今回はまず「宮戸島」の注記をもつ骨角器について確認していきたい。なお基本的な器種分類方法および呼称は金子浩昌・忍沢成視に倣うこととし [金子・忍沢 1986]、一部を独自に改変した。

### (1) 生産具

狩猟・漁撈具をはじめ、加工用の道具と思われるものも含めて、生産具とした。未成品についても完成形態が既知の狩猟・漁撈具と近似すると推測されたものはこの中に含めた。

#### ヤス状刺突具・組み合わせ式刺突具 (第2図～第3図1)

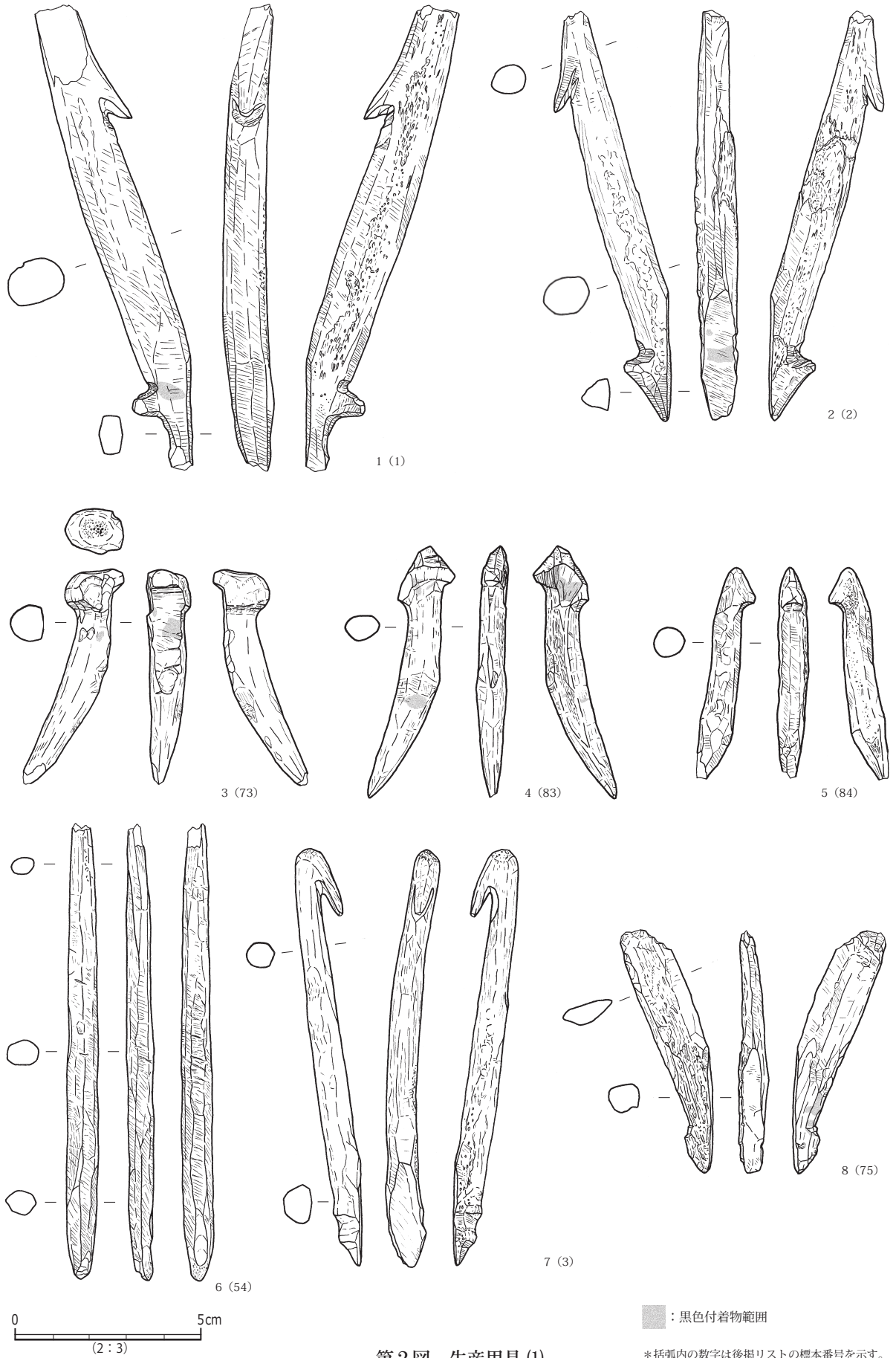
金子らの分類をもとに、直線的な棒状の形態をもつものをヤス状刺突具 (計4点)、平面的な着柄部とそれに斜行する体部をもち数本を組合わせて使用すると考えられるものを組み合わせ式刺突具 (計13点) とした。後者は東北地方とくに仙台湾沿岸の貝塚に類例が観察される。その先端形態には数種類存在すると考えられ、逆刺<sup>かえし</sup>を別造りにして体部と連結するタイプ、一体的に逆刺を作り出すタイプ、幅広い扁平の体部をもつタイプに大別される。さらに一体的に逆刺を作り出すタイプも逆刺が造られる側が体部外側か内側かで細別でき、下郷コレクション内にはどちらも存在する。逆刺を連結するタイプでは体部は存在せず逆刺のみが確認できる (第2図3～5)。逆刺の全長から刺突部全長を推定すると一体型の組み合わせ式刺突具に比べて大型品になる可能性が高い。したがって、この逆刺の一体/別造りという二者は型式変化の所産ではなく、別の機能を担ったものとみるべきであろう。また第2図8・第3図1のような幅広い扁平な体部のものもこの組み合わせ式刺突具に含めたが、その形態からは刺突というよりも押さえ込む機能が求められた一群とも推察される<sup>(1)</sup>。さらに、第2図7のように、同じ斜行する体部をもちつつ、先端部が丸く加工されながらも逆刺を有するという、これまでに例を見ないタイプも存在する。体部の取り付け角度が他の組み合わせ式刺突具とは異なりかなり鋭角であり、先端部 (開口部) での幅は非常に狭かったことがわかる。また逆刺の形状やカーブは、刺突具のような外反ではなく、内彎に近い。

以上のように、組み合わせ式刺突具はわずかな採集資料においてすらこうしたバリエーションを有する器種として存在していたと考えられ、今後の検討に俟つところが大きい。

#### 銚頭 (第3図2～8)

銚頭としたものは全部で12点あり、索孔の有無で大別できる。索孔をもつものも茎状<sup>なかご</sup>の基部を有するタイプ (第3図2) といわゆる閉窩式の回転銚頭 (同図の3・4) がある。この二つは採集資料の所属時期を考える上で注目される。2は上下二段の逆刺を両側にもつがいずれも欠損する。左右で取り付く高さにややズレがあるようだ。基部は体部に比べてやや厚みをもち、斜行するように思われる。

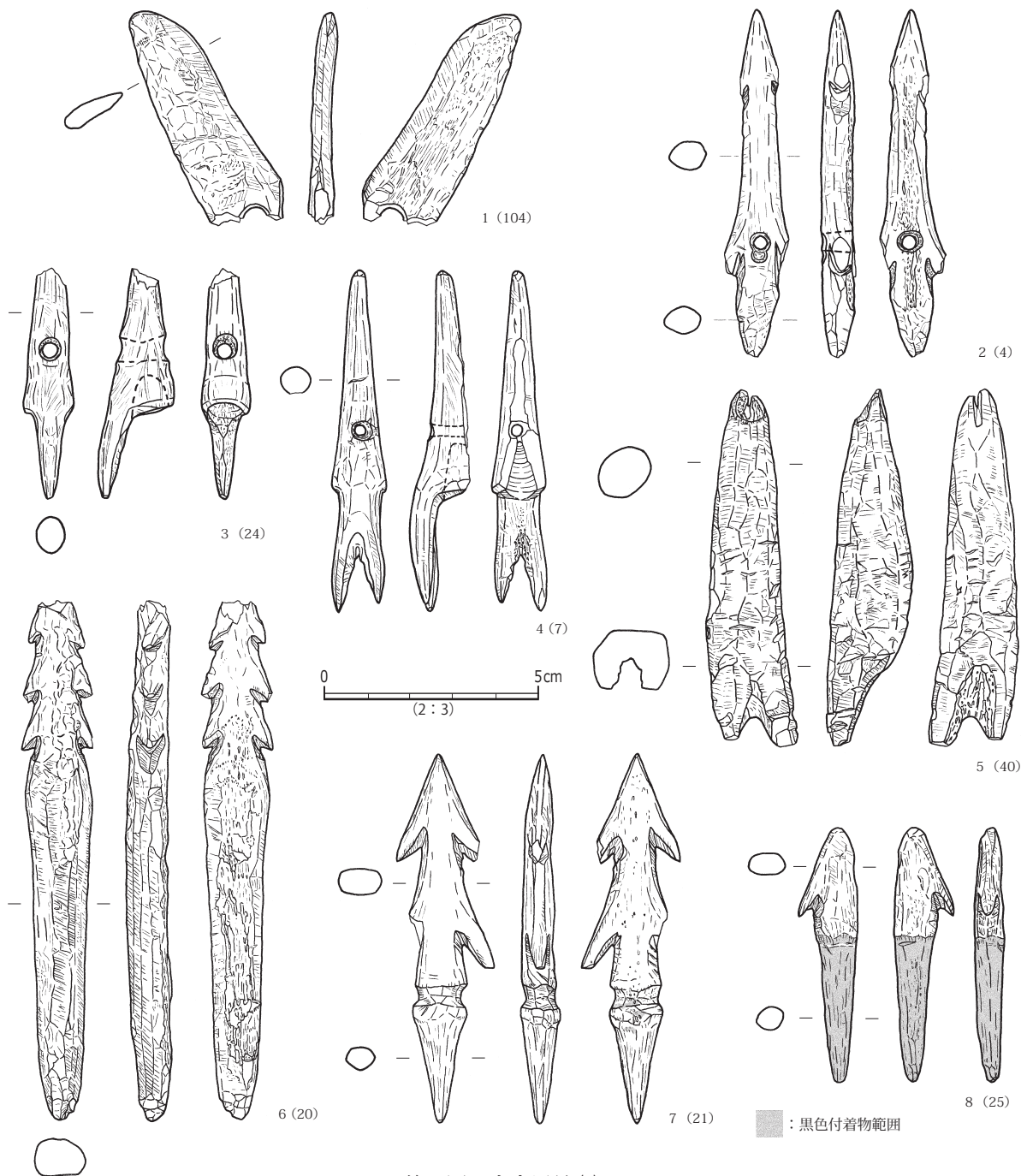
3はいわゆる「燕形」と称される形状をもつが、尾部が叉状に分岐しない。これは馬目順一によっ



第2図 生産用具(1)

て縄文時代中期末から後期に位置づけられたタイプによく似る [馬目 1983;p. 217]。ただし、馬目が図示した類例よりも尾部が円形化し長くなるなど、細いながらも発達した印象を与えることから、やや後出する要素として捉えうる。同図の5は閉架式回転銚頭の未成品と見られる。

索孔をもたないタイプは棒状で側縁に逆刺をもつ (第3図6・7)。なお同図の8は下半部に黒色付着が認められるため尖頭器 (刺突具) にひとまず分類し「有棘尖頭器」としたが、先端部が摩滅していることから積極的に刺突機能を認めにくい。あるいは再加工で変形したものかもしれない。



第3図 生産用具 (2)

**鎌・根挟み (第4図1～4)**

合計で13点が含まれる。第4図1～3は鎌、4は根挟みである。鎌身と茎を分ける<sup>まち</sup>関の有無で大別でき、前者ではその大きさについても細別できる可能性がある。両者とも茎には黒色付着物が残存、根挟みにおいてはスリットにも確認できた。

**釣針 (第4図5・6)**

数はそれほど多くなく、7点が確認できる。5のような大型品の破片は2点ある。5は逆刺と軸部の切りかえ部と先端部付近に黒色付着物が残存する。

6はグリップを有する釣針未成品である。釣針部分は軸部が欠損していると判断した。完成する釣針の大きさは5～6cm程度と推測される。グリップは左右の側縁をそれぞれ3箇所程度大きく打ち欠き、握りやすい形状を作り出している。また、グリップ下端付近には、やや深い切り込み痕跡が確認でき、しかもそこが黒変していた。

**湾曲刺突具 (第5図2～5)**

「湾曲刺具」[東北歴史資料館 1985;p. 11]・「鈎先」[小井川 2002;p. 52]・「湾曲尖頭器」[会田 2007a]とも称される一群の器具である。今回の報告ではひとまずその呼称を湾曲刺突具とした。基部と思われる位置に2箇所の穿孔を有するタイプと無孔のタイプがあり、形態的な類似性や基部にアスファルト付着痕跡を有するという共通性から、同じものとして捉えられるようになっている。ただしその機能についてはまだ定説をみていない。ここでは、この器具が仙台湾沿岸に色濃く分布するという事実と、その帰属時期が縄文時代後期後葉から晩期と考えられていることを挙げておくに留める[会田 2007a]。

下郷コレクションの中に含まれるものはすべて無孔のタイプで4点を数える。基部での黒色付着物が確認できた例は第5図2・4がある。4は図の上部では自然面らしき平滑面が残るものの鹿角表面の角溝痕跡は残存が弱く、一定の加工を経ていると理解できる。とはいえ、内湾部分の剝離や基部外湾側の調整が粗い状態にある。黒色部分の理解や、小さな加工面が連続する状態をもって完成形とみられる同図の5とあわせて、今後この器具の最終調整段階加工がいかなるものなのか確認が必要であろう。

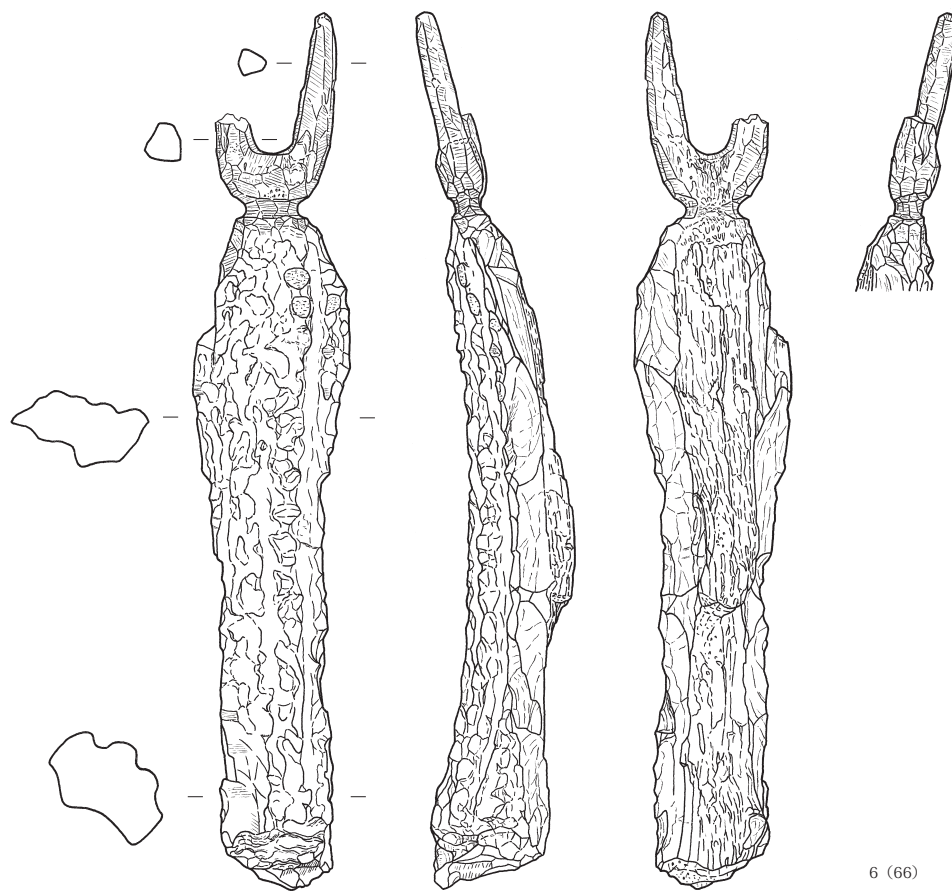
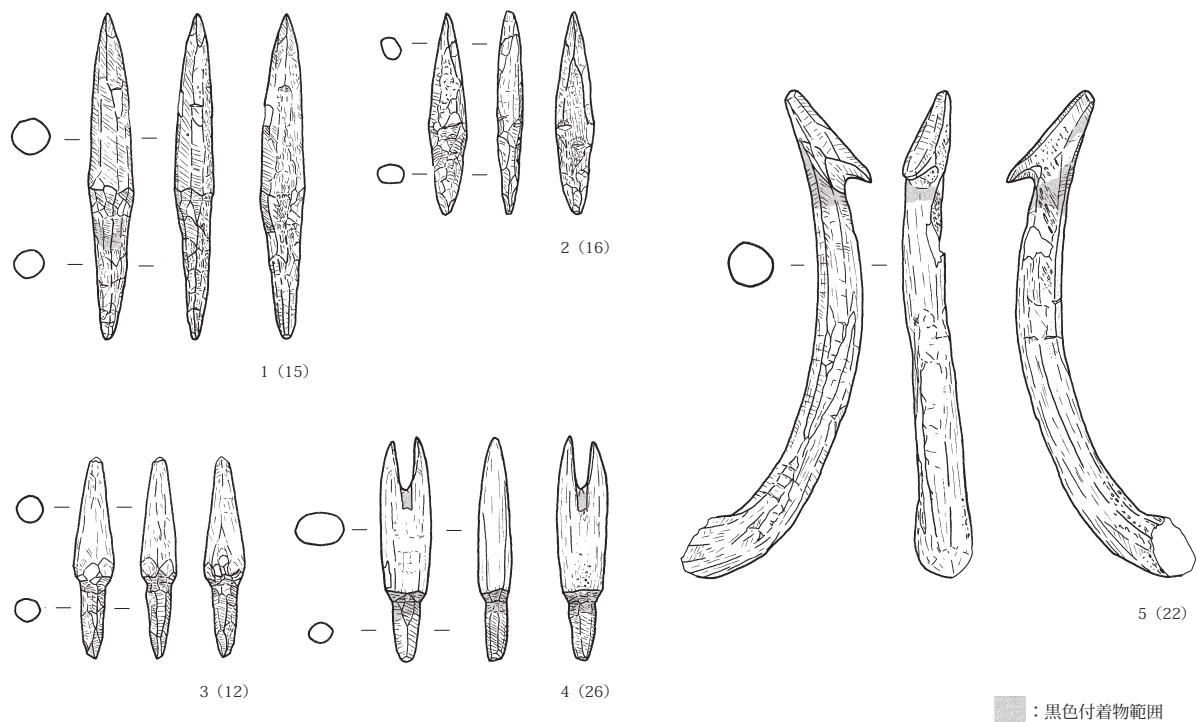
**ヘラ・刺突具・その他 (第6図1～5)**

ヘラは11点が確認できた(第6図1・2)。この他にもかなり薄くなったものや小型化したものなどが含まれていた。

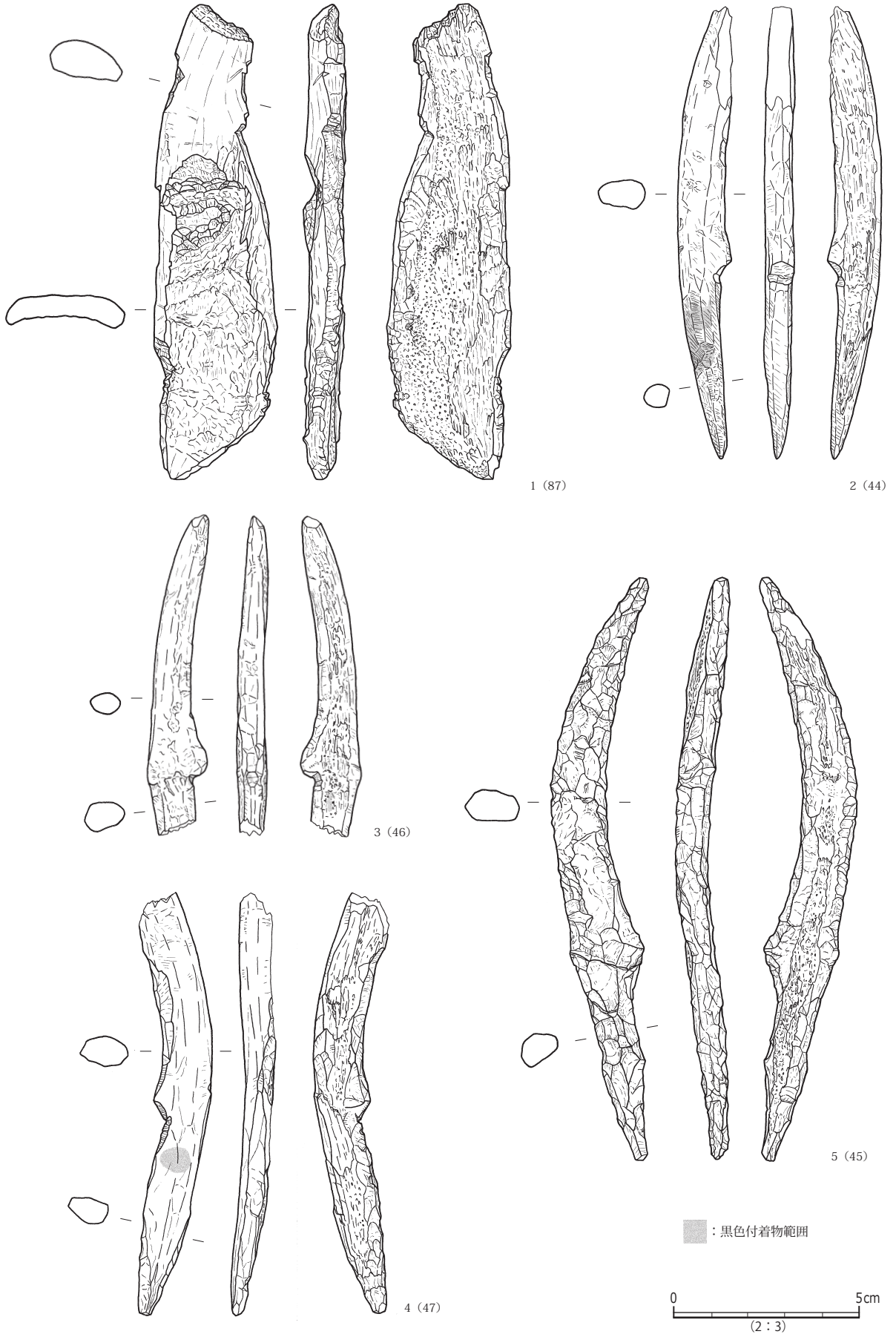
同図の3と4はいずれも鳥類の長管骨を使った刺突具で、3は突端を斜めに切断および研磨し、4は近位端付近を残しながらも骨幹中央付近でやはり斜めに切断、破断面を削っている。具体的な用途は不明だが、先端を尖鋭化していることから刺突目的とみなした。

5は短い枝角をそのまま転用、角先端にあたる部分には敲打痕のような鈍化が観察できる。ハンマーまたは押圧剝離具として用いられたと考えられる[会田 2007a]。

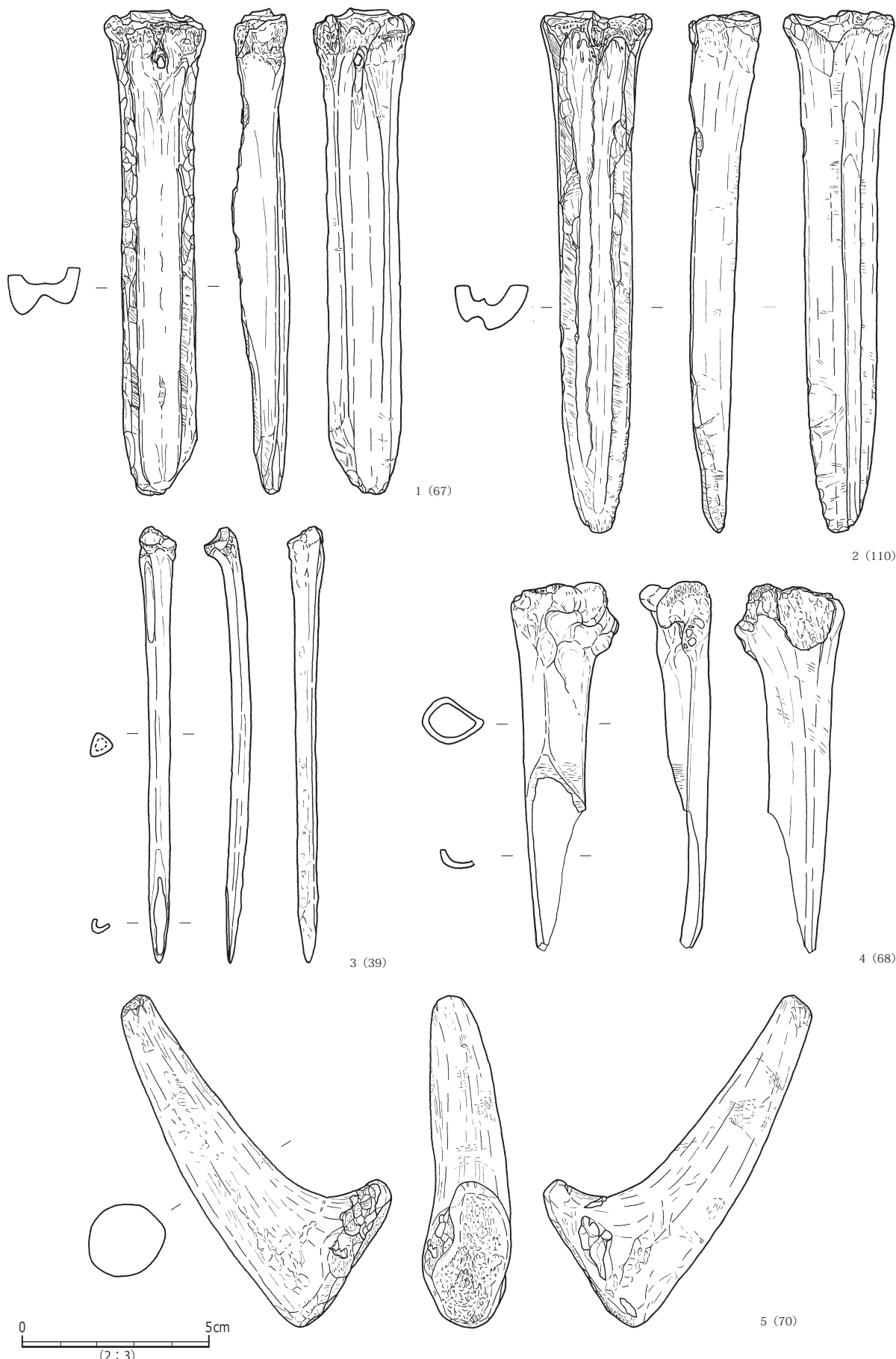
なお図化していないが、針や錐(イノシシ牙製)と思われる加工品も含まれていた。



第4図 生産用具(3)



第5図 生産用具(4)



第6図 生産用具(5)

## (2) 装飾具類

ここでは髪飾や垂飾などの装飾具に加えて、呪術的・威儀的な機能を併せ持つと考えられる器種を含めて装飾具類とした。なお第1表に掲出した骨角器以外にもベンケイガイ製貝輪が1点含まれている [大阪歴史博物館 2015; p. 56]。

### 髪飾 (第7図1～7)

第7図1～7をここでは髪飾と判断した。1～5までは彫刻により頭部に装飾が施される。1は軸部の大半が欠損したと考えられるが、全長はおそらく15 cmから20 cm程度だったと推測される。正面に3つ、上面(頂部)に1つの貫通した穿孔をもつ。正面頭頂部近くと頂部には2つの窪みがある。2は頭頂部および体部下半を欠損し、全長は不明。頭部左側にも穿孔が施されていたようだが欠損している。裏面の側縁には素材切り出し段階での擦り切り痕が残りに、海綿質も不整形のまま残されるなど、線刻の丁寧さとは様相を異にする。なお線刻は三叉文を意図したと見られる。3は山状の頭頂部に入り組み風の沈線が刻まれ、その下にはくびれ部を挟んで窪みを施した文様帯が位置する。頭部全体は赤彩されている。上面図より明らかなように頭部横断面は三角形を呈し、穿孔はその各面に施されている。4は頭部を工字状に加工、軸部先端から中央付近までが欠損。表面には骨溝の痕跡が残存する。やや粗めの研磨痕が残る。5はやや扁平な円形に削り出しただけの単純な頭部をもつ。6・7についてははたして髪飾としてよいか判断に窮するが、表面の加工が丁寧であることからここに含めた。

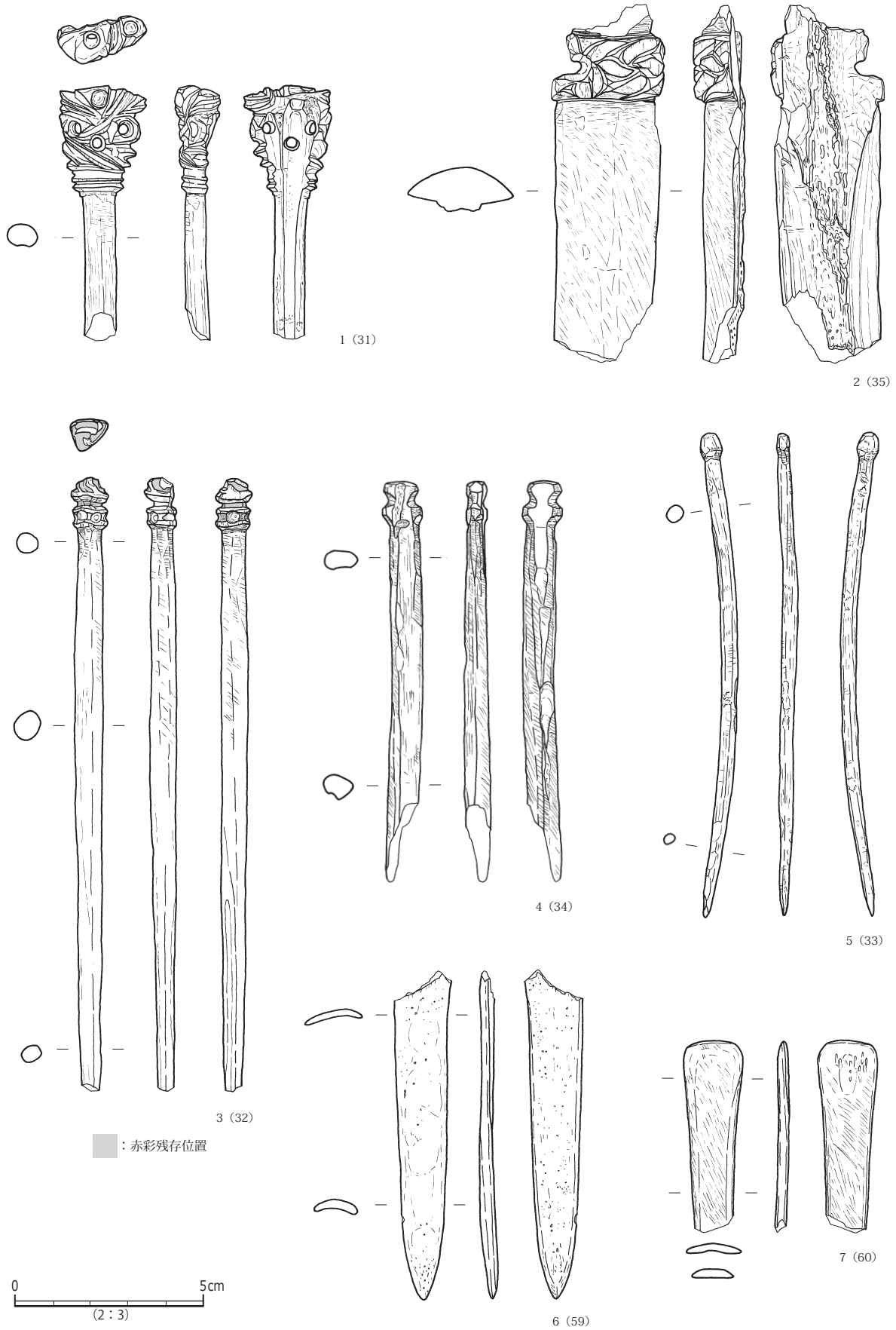
### その他 (第8図)

第8図1は鯨骨製刀形製品の柄部分で、刀身の大半は欠損している。3はイルカの肋骨製で、ここでは腕飾としたが、仮に器体のカーブを用いて正円形に近づけようとするに連結後の直径が非常に大きくなることから、腕以外(例えば首など)への装着もありえる<sup>(2)</sup>。海獣骨製の器具はこの二点が確認されたのみだが、いずれもやや特殊な器具と言える。2は頭部に装飾をもった棒状装飾具で、軸部の先端が欠損しているため全長および全体の形状はわからないが、その太さからみて髪飾ではないと判断した。頭部上面から側面にかけて穿孔が貫通する。よく似た資料が東京国立博物館収蔵の瀬沢貝塚出土品に含まれている [金子ほか 2009; p. 47]。

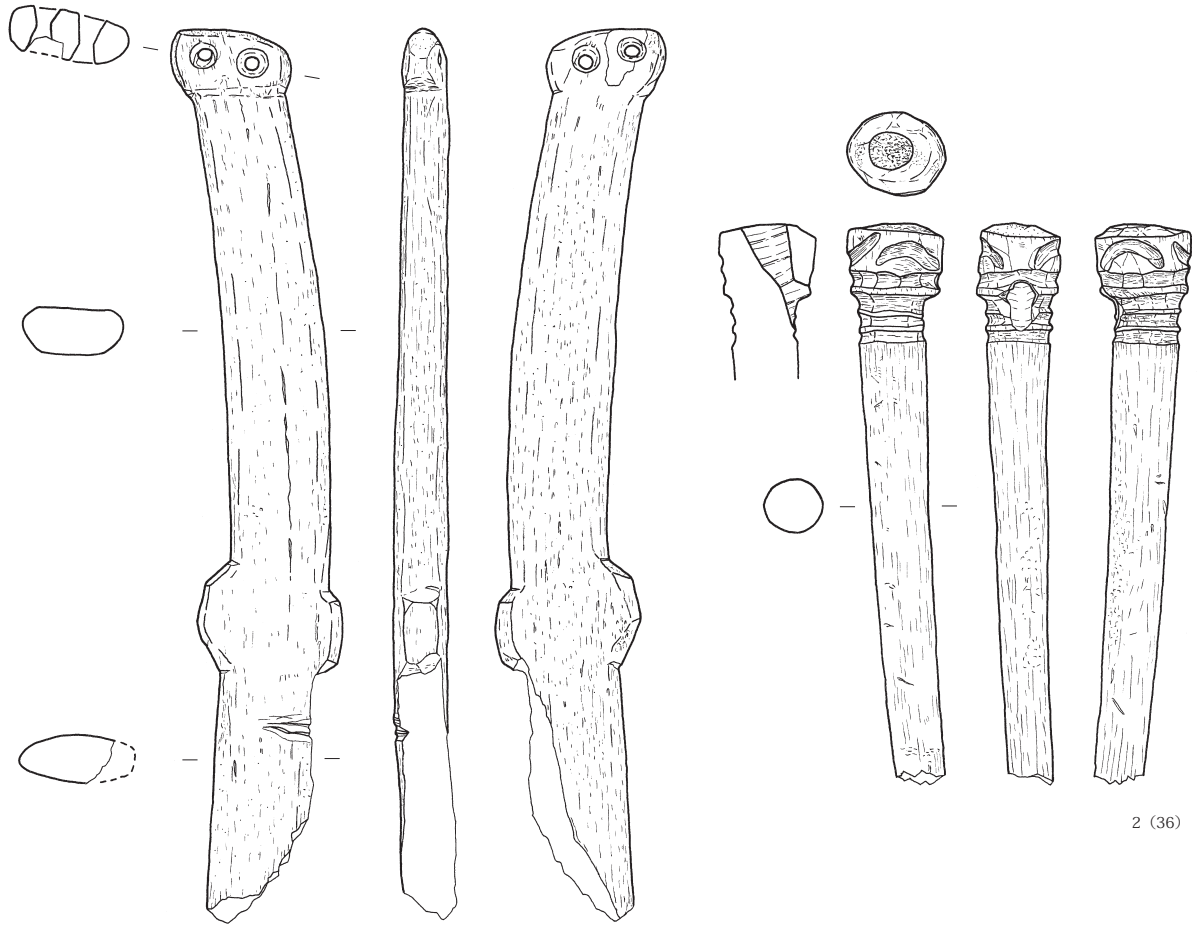
## (3) 素材類

明確な完成品形態が推測できないものを素材類としてまとめた。そのなかにあつて第5図1はその形状から完成形をイメージできるものかもしれない。鹿角の枝角先端～分岐部を利用しており、外表面を打ち欠いて平滑化するとともに、板状に打ち割ったと考えられる。釣針あるいは湾曲刺突具の素材と思われる。

このほか素材類にはシカの中足骨(遠位端除去済)がほぼ完全な形で存在したほか、除去された遠位端が含まれる(写真1上)。これらにはかなり鋭利な擦り切り痕(カットマーク)が認められる。ただし、カットマークの位置と実際の破断箇所がずれているものがあることや、いわゆるスパイラルフレイク(菱形骨片、写真1-2)が含まれていることから、擦り切りと打ち割りの併用で遠位端除去

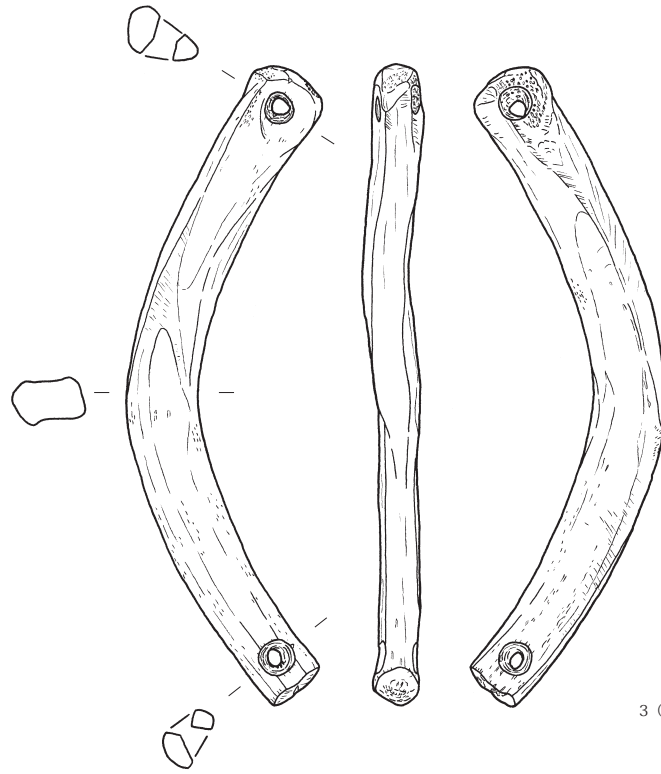


第7図 装飾品等 (1)

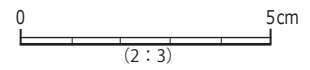


1 (18)

2 (36)



3 (37)



第8図 装飾品等(2)



写真1 加工痕のあるシカ骨（上）・角（下）

第1表 下郷コレクションの里浜貝塚採集骨角器

(単位: mm)

標本番号	遺跡名注記	番号注記	器種・名称	残存状況	長さ	幅	厚さ	素材種類	素材部位	備考	図中番号
1	宮戸	1120	組み合わせ式刺突具	先端欠損	(128)	15	13	シカ	角	黒色付着物。銚か。	2-1
2	宮戸島	1120	組み合わせ式刺突具	先端欠損	(110)	11	10	シカ	角	黒色付着物。銚か。	2-2
3	宮戸島	1120	組み合わせ式刺突具か	完形	110	8	8	シカ	角	先端が円形に加工。	2-7
4	宮戸	1122	銚頭	ほぼ完形	80	9	7	シカ	角	ラインホールあり(穿孔しなおしている)。	3-2
5	宮戸島	-	閉窩式銚頭	先端およびソケットの一部を欠損	(82)	14	15	シカ	角		
6	宮戸島	1124	閉窩式銚頭	完形	60	13	12	シカ	角	貼紙剥がし痕あり。	
7	宮戸	1124	閉窩式銚頭	ソケットの一部を欠損	79	7	7	シカ	角		3-4
8	宮戸島	-	銚頭	完形	88	12	8	シカ	角	未成品	
9	宮戸	-	銚頭	先端部	(59)	9	7	シカ	角		
10	宮戸	-	組み合わせ式刺突具	頭部	(47)	8	7	シカ	角		
11	宮	1116	鏃	中間部~基部	(39)	4	4	シカ	角	遺跡名注記にやや不安。	
12	宮戸	-	鏃	ほぼ完形	(40)	5	5	シカ	角	茎に黒色付着物。	4-3
13	宮戸	-	鏃	ほぼ完形	42	5	4	シカ	角		
14	宮戸	1126	鏃	基部欠損	(49)	11	9	シカ	角	スリットタイプ(根ばさみ)。紙ラベル(「大美」)貼付。	
15	宮	-	鏃か	完形	64	7	7	シカ	角	茎に黒色付着物。	4-1
16	宮戸	-	鏃	完形	39	6	5	シカ	角		4-2
17	宮戸島	-	鏃	完形	49	7	6	シカ	角		
18	宮戸(島)	1144	刀形製品	柄部~刀身の一部	(177)	20	9	ケジラ類	不明	「(大) 峯」の注記あり。	8-1
19	宮戸島	1150	牙製品(雉または刺突具)	軸部欠損	(82)	12	5	イノシシ	牙		
20	宮戸島	1121	銚頭	先端欠損	(120)	12	9	シカ	角		3-6
21	宮戸島	1121	銚頭	逆刺の一部を欠損	85	6	6	シカ	角		3-7
22	宮戸島	1131	釣針	湾曲部~先端	(98)	9	8	シカ	角	先端(逆刺付近の軸部)に黒色付着物。	4-5
23	宮戸島	1133	釣針	湾曲部~先端	(60)	6	7	シカ	角	先端(逆刺~軸部)に黒色付着物。	
24	宮戸	-	閉窩式銚頭	先端一部欠損	(53)	12	14	シカ	角	尾部が分岐しないタイプ。	3-3
25	宮戸	-	有棘尖頭器	基部	59	6	5	シカ	角	銚頭が再加工により縮小したものか。	3-8
26	宮戸	1126	鏃	完形	44	9	7	シカ	角	スリットタイプ(根ばさみ)。スリットと茎に黒色付着物。	4-4
27	宮戸	1126	鏃(未成品)	先端欠損	(48)	11	6	シカ	角	スリットタイプ(根ばさみ)。貼紙剥がし痕あり	
28	宮戸	1126	鏃	先端欠損	(39)	8	7	シカ	角	スリットタイプ(根ばさみ)。スリットと茎に黒色付着物。	
29	宮戸	1130	ヘラ	完形	107	28	14	シカ	中足骨	後面。近位端側。	
30	宮戸	-	ヘラ	先端欠損	(92)	28	17	シカ	中足骨	右側後面。近位端側。	
31	宮戸島	1135	髪針	頭部	(66)	8	6	シカか	中手骨か	接合(合成樹脂らしき接着剤)資料。	7-1
32	宮戸島	1135	髪針	先端欠損	(166)	10	9	哺乳類(同定不可)	不明	シカ中手/中足骨の可能性あり。頭部に装飾と赤彩。	7-3
33	宮戸島	1135	髪針	完形	126	4	4	シカ	鹿角	頭部を円形に加工。	7-5
34	宮戸	1135	髪針	頭部~中間部	(105)	8	5	シカ	中手/中足骨	頭部を工字形に加工	7-4
35	宮戸	1145	装飾具	頭部~中間部	(94)	27	11	シカ	角	頭部に線刻の装飾	7-2
36	宮戸島	1143	棒状装飾具	頭部~中間部	(110)	11	10	シカか	角か	頭部に穿孔。	8-2
37	宮戸島	1141	腕飾	完形	174	14	8	イルカ類	肋骨(骨幹)	やや大型。両端に穿孔。	8-3
38	宮戸島	-	非加工品	骨端~骨幹の一部	(75)	-	-	アホウドリ科	尺骨(遠位端)	コアホウドリより大型。先端欠損。刺突具の素材か。	
39	宮戸島	1128	刺突具か	完形	115	6	6	ウ科	尺骨(近位端~骨幹)	ウとしては小型。先端を斜めにカットして研磨(あるいは使用による摩滅か)。	6-3
40	宮戸	1125	閉窩式銚頭(未成品)	先端欠損	(82)	16	18	シカ	角		3-5
41	宮	-	銚頭	先端部~中間部	(75)	15	8	シカ	角		
42	宮戸	-	鏃または組み合わせ式刺突具	完形	61	10	7	シカ	角	未成品か。	
43	宮戸	-	釣針	湾曲部~先端	(58)	5	6	シカ	角	組合せ式か。逆刺外面と逆刺直下に黒色付着物。	
44	宮戸	-	湾曲刺突具	完形	(119)	12	7	シカ	角	穿孔なし。装着部に黒色付着物。	5-2
45	宮戸島	1147	湾曲刺突具か	完形	155	15	8	シカ	角	穿孔なし。未成品か。	5-5
46	(宮か)	-	湾曲刺突具か	先端部	(85)	11	8	シカ	角	穿孔なし。	5-3
47	宮戸	-	湾曲刺突具か	先端部~中間部	(111)	12	8	シカ	角	穿孔なし。未成品か。	5-4
48	宮戸	1127	銚頭か	基部先端	(35)	8	7	シカ	角	黒色付着物。	
49	宮戸	1127	刺突具の先端か	先端部	(48)	9	8	シカ	角	加工中に破断か。	
50	宮戸	1127	鏃	先端部	(40)	7	6	シカ	角	加工中に破断か。	
51	宮戸	1127	髪針か	頭部	(43)	8	6	シカ	角	凹線による彫刻施文。	
52	宮戸	1127	鏃か	基部付近	(46)	10	7	シカ	角	未成品。加工中に破断か。カットマーク残る。	
53	宮戸島	1127	棒状加工品	端部	(69)	8	7	シカ	角	断面円形。	
54	宮戸島	1115	ヤス状刺突具	先端を一部欠損	(120)	8	7	シカ	中手/中足骨		2-6
55	宮戸・宮戸島	-	髪針	頭部・中間部	(52)	6	6	シカ	中手/中足骨	頭部に三山状装飾。3つの破片を紙テープにて固定。うち先端部の破片に「薬師台」の注記。	
56	宮戸	1136	釣針か	軸部	(64)	5	5	シカ	角		
57	宮戸	-	棒状刺突具	中間部	(63)	6	5	哺乳類(同定不可)	不明	鹿角またはシカ/イノシシ四肢骨か。	
58	宮戸	-	棒状刺突具	中間部	(47)	5	5	哺乳類(同定不可)	不明	鹿角またはシカ/イノシシ四肢骨か。	
59	宮戸	1129	髪針か	先端部	(86)	15	2	哺乳類(同定不可)	不明	鹿角または鯨骨か。幅広の器体。断面扁平。	7-6
60	宮戸島	1129	髪針か	頭部	(50)	15	3	哺乳類(同定不可)	不明	鹿角またはシカ/イノシシ四肢骨か。幅広・扁平の器体。	7-7
61	宮戸	-	ヘラ	ほぼ完形	108	25	12	シカ	中足骨	左側前面。近位端側。	
62	宮戸	-	ヘラ	頭部を一部欠損	(112)	17	6	シカ	中足骨	近位端側後面か。表面風化。	
63	宮戸	-	ヘラ	頭部を一部欠損	(101)	17	8	シカ	中足骨	左側後面。近位端側。	
64	宮戸	1131	刺突具の素材か	先端部欠損	(96)	12	6	シカ	中足骨	右側側面。近位端側。	P3
65	宮戸島	-	釣針(未成品)か	基部か	(62)	10	7	シカ	角		

標本番号	遺跡名注記	番号注記	器種・名称	残存状況	長さ	幅	厚さ	素材種類	素材部位	備考	図中番号
66	宮戸・宮戸島	1147	釣針未成品	完形	173	6	5	シカ	角	素材(角)から切り離す直前の状態。行書風の書体。	4-6
67	宮戸	1130	ヘラ	完形	128	19	14	シカ	中足骨	左側後面。近位端側。	6-1
68	宮戸島	1131	刺突具か	尖端欠損	(98)	17	7	アホウドリ科	上腕骨(遠位端)	コアホウドリより大型。骨幹側面を斜めに切り落とした切削痕と研磨痕が残る。	6-4
69	宮戸	1151	非加工品	-	(64)	10	7	イノシシ	下顎第1切歯		
70	宮戸島	1148	加工具(ハンマー)か	ほぼ完形	98	21	19	シカ	角	短い枝角。使用の為と思われる摩滅光沢あり。	6-5
71	宮戸	1120	組み合わせ式刺突具	先端を一部欠損	(130)	13	9	シカ	角	未成品か。	
72	宮戸	-	組み合わせ式刺突具	基部	(63)	10	9	シカ	角		
73	宮戸	-	組み合わせ式刺突具(逆刺)	完形	60	10	9	シカ	角	逆刺と体部が別造りのタイプ。	2-3
74	宮戸	-	組み合わせ式刺突具(逆刺)	ほぼ完形	45	9	7	シカ	角	逆刺と体部が別造りのタイプ。突起下部に黒色付着物。	
75	宮戸	-	組み合わせ式刺突具	基部	(68)	13	5	シカ	角	刺突部位が扁平幅広いもの。	2-8
76	宮戸	1115	棒状刺突具か	頭部欠損	(130)	10	7	同定不可	不明	大型硬骨魚類の鱗棘か。未成品の可能性。	
77	宮戸	-	素材剥片	-	145	9	7	シカ	中手/中足骨	擦り切り痕あり。	P2
78	宮戸	1149	切断痕のある鹿骨	遠位端	(65)	35	24	シカ	中手骨	カットマーク。	P4
79	宮戸	1149	切断痕のある鹿骨	遠位端	(48)	32	22	シカ	中足骨	カットマーク。	P7
80	宮戸	-	切断痕のある鹿骨	遠位端	(49)	36	24	シカ	中足骨	カットマーク。	P5
81	宮戸	-	切断痕のある鹿骨	遠位端	(43)	34	24	シカ	中足骨	カットマーク。	P6
82	宮戸	-	切断痕のある鹿骨	遠位端	(35)	31	22	シカ	中手骨	カットマーク。	P8
83	宮戸	1119	組み合わせ式刺突具(逆刺)	完形	68	11	8	シカ	角	逆刺と体部が別造りのタイプ。突起下部に黒色付着物。	2-4
84	宮戸島	1119	組み合わせ式刺突具(逆刺)	先端や欠損	(57)	9	6	シカ	角	逆刺と体部が別造りのタイプ。突起下部に黒色付着物。	2-5
85	宮戸	1127	組み合わせ式刺突具か	両端欠損	(49)	12	6	シカ	角	未成品か。やや扁平。釣針未成品の可能性も。	
86	宮戸	1115	ヤス状刺突具	基部～中間部	(101)	10	9	シカ	中手/中足骨		
87	宮戸島	-	素材	-	126	32	9	シカ	角	板状。釣針または組み合わせ式刺突具の素材か。	5-1
88	宮戸	-	素材	-	97	19	8	シカ	角	髄質は切除されてほぼ緻密質のみ。やや湾曲。	P13
89	宮戸	-	素材剥片	-	134	20	6	シカ	中足骨	側面。加工された先端をもつ。ヘラの破損品か。	
90	宮戸	1127	釣針	軸部	(62)	7	7	哺乳類(同定不可)	不明		
91	島	-	不明	-	(83)	7	6	シカ	角	棒状。表面風化。	
92	宮戸	1115	ヤス状刺突具	先端～中間部	(88)	9	6	シカ	中手/中足骨		
93	宮戸	1115	ヤス状刺突具	中間部～基部	(91)	10	9	シカ	中手/中足骨	表面やや風化。白色付着物(カルシウムか)。	
94	宮戸	1115	非加工品か	-	(118)	-	-	同定不可	不明	棒状。大型硬骨魚類の鱗棘か。	
95	宮	1127	刺突具か	基部	(27)	6	5	シカ	角	暗色付着物。	
96	宮戸	1127	針か	先端付近	(70)	5	4	同定不可	不明	大型硬骨魚類の鱗棘か。	
97	宮戸	1136	針か	先端部	(54)	5	3	同定不可	不明		
98	宮戸島	-	針	頭部	(110)	7	5	シカ	中手/中足骨	断面矩形。接合部位は宮戸島番号をつけた個体には含まれていないことから、別遺跡との混入が危惧される。	
99	宮戸島	-	針か	頭部	(56)	10	6	イノシシか	四肢骨骨端		
100	宮戸	1146	非加工品か	-	(69)	7	8	同定不可	不明(長骨)	ウミガメ指骨か。カットマークあり。骨幹の断面は楕円形。	
101	宮戸	-	棒状加工品	先端	(70)	8	7	シカ	鹿角	土器表面加工具[会田1994]か。	
102	宮戸島	1134	不明	-	(47)	9	7	鳥類または哺乳類(同定不可)	不明(長骨)	鳥類尺骨か。上下端部に切断痕明瞭。素材の可能性。	
103	宮戸	1127	加工痕のある鹿角片	-	48	9	8	シカ	角		
104	宮戸島	1140	組み合わせ式刺突具	先端	(57)	15	4	シカ	角	穿孔あり。扁平タイプ。	3-1
105	宮戸	-	素材剥片か	-	79	11	7	シカ	角		P15
106	ミヤト	-	切断痕のある鹿角剥片	-	74	12	7	シカ	角	角枝	P14
107	宮戸	-	ヘラ	先端部～中間部の一部	(97)	18	9	シカ	中足骨	前面か。	
108	宮戸	-	ヘラ	先端部～中間部の一部	(77)	17	6	シカ	中手骨	前面か。	
109	宮戸	1130	ヘラ	先端部	(53)	15	8	シカ	中手/中足骨		
110	宮戸	1130	ヘラ	完形	138	19	12	シカ	中足骨	左側前面。近位端側。接合。	6-2
111	宮戸	-	切断痕のある獣骨	完形	144	27	28	シカ	中足骨	遠位端の清車を切除。その際の工程が波状に残存か。その下にカットマークも残る。	P1
112	小門■	-	棒状刺突具か	片側の端部を欠損	(122)	13	9	シカ	角	未成品。別に「三■.二」の注記。コレクション内に「小門馬三八.二」(角座)という注記が存在するので、それと同じ場所での採集か。風化が激しい。	
113	宮戸島	1131	ヘラ	頭部から先端付近の縁辺	(101)	17	7	シカ	中足骨	左側側面。近位端側。	
114	宮戸	-	切断痕のある鹿角	枝部	80	48	26	シカ	角	右角の第2分岐か。幅広い刃部(石斧か)での打撃痕あり。ただしそれによって切断は行われていない。幹との切断は擦り切り。	P11
115	宮戸島	-	切断痕のある鹿角	枝部	56	44	24	シカ	角	右角。第2または第3分岐か。擦り切りにより先枝を切断。幹切断は打撃によると思われる。	P12
116	宮戸	1148	切断痕のある鹿角	角座	83	54	53	シカ	角座	落角。第1枝・角幹の両方が擦り切り+折りで切除。	P9
117	宮戸	-	切断痕のある鹿角	角座	86	61	61	シカ	角座	落角。第1枝・角幹の両方が擦り切り+折りで切除。	P10
118	宮戸島	1148	切断痕のある鹿角	幹(第2～第4枝か)	285	32	27	シカ	角	第2・3枝が打ち割りによって切除。	

《表註》

- ・上表は、下郷コレクション中の骨角器のうち「里浜貝塚」の注記をもつ個体およびその周辺において管理されていた資料を中心にリスト化したものである。
- ・当資料群受け入れ時には個体番号を与えられていなかったため、現状の管理区分に順じて今回新たに「標本番号」をナンバリングした。
- ・計測単位はミリメートルで、残存部での計測値については括弧で表記した。
- ・「器種・名称」欄で「非加工」としたものは自然遺物であり、今回は計測を行わなかった。
- ・「図中番号」は「1-1」であれば第1図1を示し、写真掲載資料については「P」で示した。
- ・素材同定には樋泉岳二氏の協力を得た。

が行われていたとみえる [山川 1992]<sup>(3)</sup>。また鹿角も枝角の破片や角座、さらに第2枝～4枝に相当すると思われる角も含まれている。これらのうち特に角座には明瞭な擦り切り痕と厚みのある刃部を打ち付けた痕跡がともに確認できる (写真1-9～12)。

## 2. その他機関が所蔵する里浜貝塚採集資料

現在のところ当館以外に高島多米治による採集品を所蔵している機関には辰馬考古資料館、天理参考館、國學院大學、耕三寺博物館が判明しており、このうち里浜貝塚の資料を所蔵している機関は辰馬考古資料館と耕三寺博物館である。2機関の所蔵資料にも下郷コレクションと同様の注記が施されていて、これが高島採集資料の根拠となっている。

辰馬考古資料館には現在7点の里浜貝塚採集品が所蔵され、すべて骨角器である (第2表)。辰馬考古資料館所蔵品でもっとも目をひくものはやはり又状角製品であろう (第10図)。古くはN.G. マンローの『Prehistoric Japan』に掲載された資料 [モンロー 1982; Fig. 57] で、それ以降も腰飾として広く紹介されてきた。シカの角冠<sup>(4)</sup>を利用していると思われ、第10図では鹿角の正位を想定して配置した。すなわち縦方向のもっとも太い部分が角幹で、そこから三方向に枝分かれしていく。角冠がこのサイズで三方向に分岐するニホンジカの個体はおそらく稀だったのではないだろうか。実際この又状角製品はかなりの重量があり、角全体がかなり大型であった (=体も大きい) とみられる。

製品は、角後面側の表面を縦方向に打ち欠いたのち、丁寧に平坦面を作り出している。ただし海綿質の露出が少ないことから、当初より緻密な角質部分を用いる意図で平坦面を作り出していることがわかる。前面部分は角畝と角溝を除去してさらに研磨したのち、窪み・穿孔や溝を彫刻、赤彩を施して完成となる。

この又状角製品の使い方を考える上で、後面に確認できる四箇所の穿孔 (図中①～④) は示唆的である。それぞれ側面ないし小口面に貫通するとともに、①と④、②と③を結んだ線はほぼ平行となり、この組み合わせが意図的な配置にあることがわかる。しかも四箇所という数は垂下よりも固定を目的としたものであると考えられることから、その意図とはおそらく何かに綴じ付けるためであり、とするとこれらを水平になるよう配置した状態が本来の正位だろう。それ以外の前面側にある窪みは貫通しない。

第9図2は組み合わせ式刺突具で、先端を欠損するがほぼ完形に近い。全長が86mmと、この種の

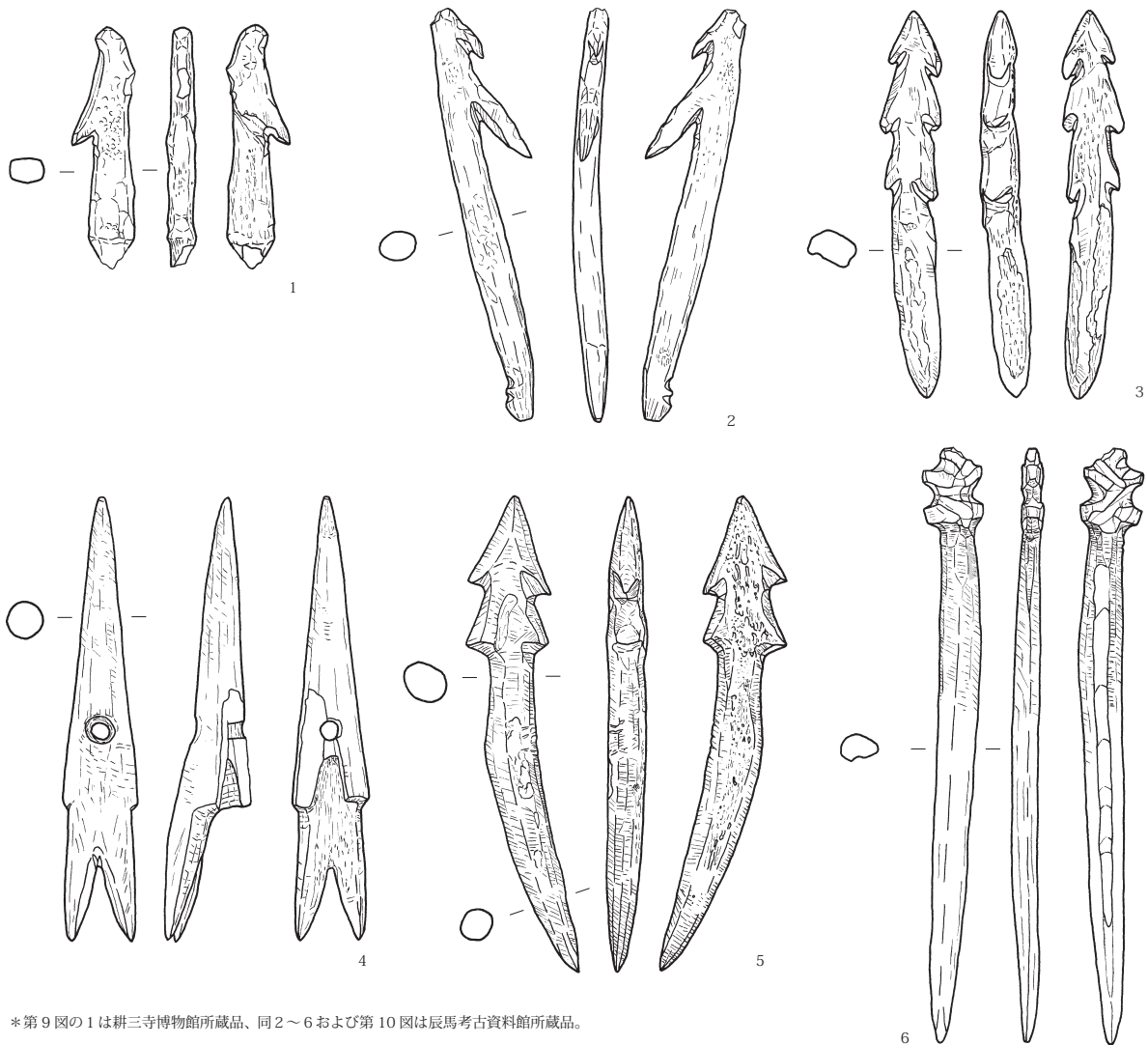
第2表 辰馬考古資料館所蔵の里浜貝塚採集骨角器

(単位: mm)

遺跡名注記	数字注記	その他	器種・名称	残存状況	長さ	幅	厚さ	備考	図番号
1 宮戸	1124	-	閉窩式銚頭	ほぼ完形	90	15	14		9-4
2 宮戸島	1124	-	閉窩式銚頭	ほぼ完形	57	13	13		-
3 宮■島 (宮戸島カ)	1120	-	組み合わせ式刺突具	先端わずかに欠損	86	7	6	マンロー Fig.28-3 [モンロー 1982]、岸上 Fig.52 [岸上 1911] と同一。	9-2
4 宮戸島	1119	-	有尾刺突具	完形	98	10	8	二段逆刺。岸上 Fig.47 [岸上 1911] と同一。	9-5
5 宮戸	1121	-	銚頭 (未成品カ)	完形	79	8	8		9-3
6 宮戸島	1135	-	髪針	完形	121	8	5	マンロー Fig.159-2 [モンロー 1982] と同一。	9-6
7 宮戸島	1137	-	又状角製品	ほぼ完形	167	33	32	赤彩残存。装飾面と裏面に貫通する穿孔は4箇所。幅と厚さは断面図 A-A' ラインで計測。マンロー Fig.57 [モンロー 1982] と同一。	10

器具としてはかなり小型である。また内側に二段の長い逆刺が付く点も類例が少ない。3は三段の逆刺をもつ銚頭である。基部の調整程度が未成品としての印象を与える。4は閉窩式の銚頭で、このほかに1点の閉窩式銚頭が所蔵されている。5は二段の逆刺と斜行する着柄部をもつ刺突具で、ここでは有棘刺突具として分類した。全体に丁寧に削りを施しており、逆刺端部も尖鋭である。着柄方法を推測させる黒色付着物などは認められない。6は髪飾と考えられる。頂部に突起をもつ工字形の頭部を作り出したのち、赤彩を施している。これと似た形の髪飾に上述した第7図4がある。辰馬考古資料館所蔵品は沈線が襷掛け状に行われている点で異なるが、頭部を扁平に仕上げる点などは共通点として指摘しておきたい。

もうひとつの所蔵機関である耕三寺博物館には1点が所蔵されている(第9図1)[瀬戸田町教育委員会 2001]。こちらは逆刺部分と体部がわずかに残る程度で、器種の判断が難しい。おそらくは銚頭または刺突具の頭部と見られる。



\*第9図の1は耕三寺博物館所蔵品、同2～6および第10図は辰馬考古資料館所蔵品。

第9図 他機関所蔵の高島菟集品(1)



小結～器種構成および素材構成からみた採集資料の傾向

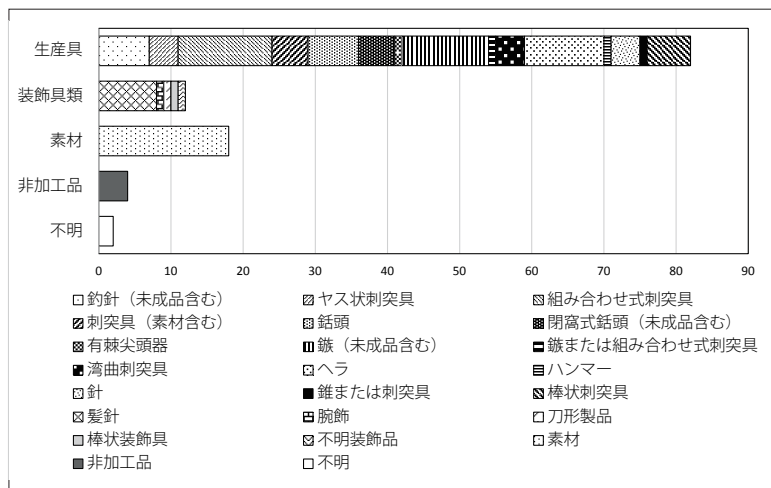
以上、下郷コレクションをはじめ里浜貝塚から高島多米治により採集されたとされる骨角器について個々の資料をみてきた。最後に、下郷コレクション骨角器群の傾向や特徴についてまとめておく。

まず、個々の骨角器を観察した結果、採集品に含まれる骨角器の形態的特長と、その採集地として注記されている「宮戸島」(里浜貝塚)という表記との間には大きな齟齬がないと判断できる。したがってコレクションの所属時期は概ね里浜貝塚の存続時期の範囲に位置づけられるのだが、問題は、里浜貝塚では縄文時代前期～晩期にかけて複数の貝塚が形成されるため、どの時期・地点に属する資料なのかという点にある。そのためにはコレクションに含まれる里浜採集の土器、さらに発掘調査データとの照合が不可欠である。

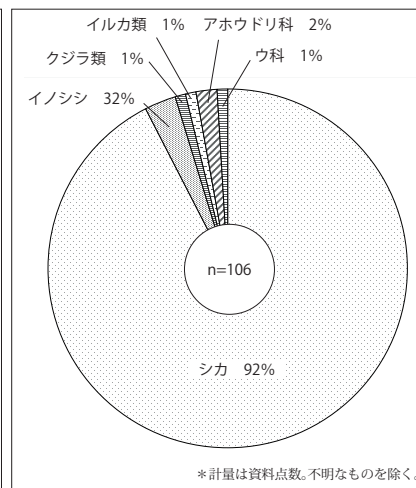
次に器種構成(第11図)に視点を移すと、もっとも多い器種が生産具で、70%を占めている。素材類の15%を含めると85%が生産具およびそのための素材であったことがわかる。装飾具類は約10%を示す。生産具のなかで器種別の構成比を見た場合、特定器種が突出する傾向はないものの、組み合わせ刺突具・鏃・釣針・銚頭・ヘラなどが多いことを指摘できる(未成品を含む)。これに対して装飾具類の場合、髪飾など彫刻が施された器種がほとんどを占め、玉類などは含まれていない。比較的認識しやすい器種が採集されたということであろうか。

さらに採集品の素材は、哺乳類、とりわけシカが圧倒的に多く、92%を占める(第12図)。シカの部位別内訳では角が約7割、四肢骨(主に中手骨・中足骨)が約3割となり、鹿角製品や素材が多い。これもやはり採集者が認識しやすかった素材(鹿角や大型の骨片)が持ち去られた結果とみなせるが、同時に、擦り切り痕が残るシカ中手・中足骨遠位端が含まれている点を考慮すれば、単に優品珍品のみを選んだとは思えない状況も指摘できる。

当該資料群は採集資料であるため、発掘調査とは異なったバイアスのもとに集積されたことは間違いない。したがってその構成内容を統計的に解釈することには自ずと限界がある。しかし同時に、コレクションに含まれる個々の遺物総体が示す傾向とこれまでの発掘調査によって得られた成果とを比



第11図 採集資料の器種構成



第12図 採集資料の素材種別

較することによって、そこに介在した選択の志向性や強度を推察することは可能であり、翻ってみれば、採集品・コレクションであることこそ当資料群の特徴でもあると考える。

次稿では、上記の成果および課題を解決するため、わずかではあるが同じくコレクション内に含まれている土器・土製品についても確認し、時期判定の根拠についてさらに検討していきたい。

## 【謝辞】

本稿を草するにあたり、下記の方々にお世話になりました。記して深謝申し上げます。

青木政幸氏（公益財団法人辰馬考古資料館）、菅原弘樹氏（奥松島縄文村歴史資料館）、樋泉岳二氏（早稲田大学）、吉田守氏（耕三寺博物館）

なお本稿には、平成 25 年度明治大学大久保忠和考古学振興基金奨励研究「明治期に採集された東北地方貝塚資料の関連資料調査」（研究代表者：加藤俊吾）の成果の一部が含まれている。

## ■ 註

- (1) 幅が広い組み合わせ式刺突具にはさまざまな形態があり [金子・忍沢 1986]、果たして同一の用途だったのか判断が難しい個体も存在する。ここでは、体部の幅が厚みよりも 2 倍以上あるものとして位置づけるのみとし、機能や形態によるそれ以上の細分は行わない。
- (2) あるいは装飾具としての機能ではなく把手としての用途を考慮してもよいのかもしれない。
- (3) 福井県鳥浜貝塚（縄文時代前期中心）から出土したシカの中手骨・中足骨を詳細に検討した山川によれば、鳥浜貝塚から見つかるこれらの骨の遠位端除去は縦割り後に行われる点において、東北地方の例と異なるという [山川 1992; p.82]。つまり東北地方の場合はまず遠位端除去を行った後、縦割り段階（山川の言う「第 1 段階」）に移ったと理解されているようである。とはいえ、山川がイメージしている東北地方の例が地域差として理解されるのか、時期差として理解されるのかについては言及されていないため、今後の検証が必要となる。
- (4) 鹿角の各部位に対する呼称は [大泰司 1983] に倣った。

## ■ 引用・参考文献（著者名 50 音順）

- 会田容弘 1994 「棒状骨角器考—宮城県里浜貝塚台地地点出土の縄文後・晩期土器の沈線施文とミガキの技術—」『考古学研究』第 41 巻第 3 号 考古学研究会；pp.39-59
- 会田容弘 2007a 「鹿角製湾曲有孔尖頭器及び湾曲尖頭器の製作技術」『考古学談叢』東北大学大学院文学研究科考古学研究室・須藤隆先生退任記念論文集刊行会 六一書房；pp.355-368
- 会田容弘 2007b 『松島湾の縄文カレンダー 里浜貝塚』シリーズ「遺跡を学ぶ」41 新泉社
- 小井川和夫・山田晃弘 2002 「里浜貝塚西畑地点出土遺物」『東北歴史博物館研究紀要』3 東北歴史博物館；pp.45-136
- 大阪歴史博物館 2012 『共同研究成果報告書 6—高島多米治と下郷コレクションについて（福田貝塚・椎塚貝塚）—』
- 大阪歴史博物館 2015 『共同研究成果報告書 9—高島多米治と下郷コレクションについて（余山貝塚編）—』
- 大泰司紀之 1983 「3. 狩猟 シカ」『縄文文化の研究 2 生業』雄山閣出版；pp.122-135
- 金子浩昌 1967 「骨製のヤス状刺突器」『考古学ジャーナル』14 ニューサイエンス社；pp.15-19
- 金子浩昌・牛沢百合子 1979 「斜行着柄加工をもつ刺突具」『考古学ジャーナル』No.170 ニューサイエンス社；pp.31-34
- 金子浩昌・忍沢成視 1986 『骨角器の研究 縄文篇 I』考古民俗叢書 22 慶友社

- 金子浩昌・松浦有一郎・望月幹夫 2009 『東京国立博物館所蔵骨角器集成』 東京国立博物館
- Kamakichi Kishinouye 1911 'Prehistoric Fishing in Japan', *JOURNAL OF THE COLLEGE OF AGRICULTURE*, vol. II no.7, Imperial University of Tokyo (岸上鎌吉 1911 「日本における原始漁撈」『東京帝国大学農科大学紀要』第2巻第7号)
- 斎藤良治 1969 「仙台湾沿岸貝塚出土の離頭銛頭について」『考古学雑誌』第55巻1号；pp.52-62
- 瀬戸田町教育委員会 2001 「三 骨角器」『瀬戸田町史』耕三寺編；pp.270-274
- 東北歴史資料館 1983 『里浜貝塚Ⅱ—宮城県鳴瀬町宮戸島里浜貝塚西畑地点の調査・研究Ⅱ』東北歴史資料館資料集7
- 東北歴史資料館 1984 『里浜貝塚Ⅲ—宮城県鳴瀬町宮戸島里浜貝塚西畑地点の調査・研究Ⅲ』東北歴史資料館資料集9
- 東北歴史資料館 1985 『里浜貝塚Ⅳ—宮城県鳴瀬町宮戸島里浜貝塚西畑地点の調査・研究Ⅳ』東北歴史資料館資料集13
- 東北歴史資料館 1986・1987 『里浜貝塚Ⅴ・Ⅵ—宮城県鳴瀬町宮戸島里浜貝塚西畑地点の調査・研究Ⅴ・Ⅵ』東北歴史資料館資料集15・19
- 東北歴史資料館 1991 『里浜貝塚Ⅷ—宮城県鳴瀬町里浜貝塚台囲頂部地点の調査—』東北歴史資料館資料集32
- 東北歴史資料館 1997 『里浜貝塚Ⅹ—宮城県鳴瀬町宮戸島里浜貝塚風越地点の調査—』東北歴史資料館資料集43
- 藤沼邦彦 1981 「宮城県における縄文時代研究略史（江戸時代～昭和20年）」『東北歴史資料館研究紀要』第7巻 東北歴史資料館；pp.1-42
- 馬目順一 1983 「閉窩式回転銛」『縄文文化の研究』第7巻（道具と技術）雄山閣出版；pp.210-224
- エヌ・ジー・モンロー 1982 『Prehistoric Japan』 第一書房（1911年刊行再版本の復刻版）
- 山川史子 1992 「縄文時代骨製刺突具の製作方法—福井県鳥浜貝塚出土獣骨資料の分析—」『考古学雑誌』第78巻第1号 日本考古学会；pp.61-106